イズラエル・シャミール著　西から迫る闇

和訳　童子丸開

（訳者からの注記）この翻訳の原典は２００７年８月に発表されたイズラエル・シャミール著“Darkness from the West”である。ウエッブ・アドレスは次の通り。

http://www.israelshamir.net/English/Eng19.htm

この論文は２００２年ごろから急に米国のカトリック教会で主に男性の信徒から「自分が子供のときに聖職者によって性的な陵辱を受けた」という訴えが大量に現れ、それが大きく新聞報道されるとみるみるうちに「訴え」の数が増えた事実に基づいて書かれている。その賠償金のためにいくつかの教区は事実上運営が不可能な状況に追い込まれている。そして今年になって再びその「訴え」が増え始めた。しかし、この大量の「訴え」の背後には何やらきな臭さが漂う。

この作品はキリスト教、特にカトリックの教義と歴史的な事情についての知識が無い場合には理解が少々困難な部分があるだろうし、また著者のシャミールがユダヤ教からキリスト教（ギリシャ正教）に改宗した熱心な宗教者であることを計算に入れておく必要もある。ロシア生まれでイスラエルに移住し、後年ベツレヘムのギリシャ正教教会で洗礼を受けデイル・ヤシン・リメンバードでパレスチナ人の解放とユダヤ人との和解に向けて活動を開始する著者にとってまさに「神は一つ」であり、シオニストとそれに加担するユダヤ人・非ユダヤ人は文字通り「神に対する最大の反逆者」にほかならない。

しかしそういった宗教的な意味合いや著者の持つ性に対する考え方はさておいても、この文章から、米国と世界でシオニストのプロパガンダ・マシンがどのように作動しどうやって人々を洗脳し、どういった社会的・政治的な効果を生み出すのかという、重要なテーマが十分に読み取れる。さらに、米国社会が誰一人としてもはやほとんど身動きの取れないほどにシオニズムに縛り付けられシオニストの意図するとおりに操られている実態が、この論文から浮かび上がるだろう。

この訳文は、『真相の深層』誌２００７年冬第１６号に私からの解説を添えて寄稿されたものである。

なおここで「ユダヤ人」と訳したのは Jew で、「ユダヤ」は Jewry である。

＊＊

「変態坊主」キャンペーンは迫りつつある戦争の明らかな徴である。もしカトリック教会が「変態坊主」の償いをするのなら、ひょっとしてユダヤは「詐欺師ユダヤ人」の償いをするとでもいうのだろうか？

西から迫る闇

イズラエル・シャミール著

Ⅰ

米国最大の使徒教会であるカトリック教会は激しい攻撃にさらされている。その攻撃の首謀者はメディアの力と司法の機構を結びつけ、米国人の金銭に対する執着心を利用し、そして教会に対してタバコ産業に与えたのと同様の仕打ちを与えた。つまり、それにカネで赦しを請うようにさせた。その銀貨３０枚（現在の値打ちで１００万ドル以上）を手に入れるチャンスを求めて、何百人もの米国人カトリック信徒が自分たちの教会を訴えたのである。【訳注:「銀貨30枚」はユダがキリストを売ったときに手に入れた金額】

この後に「変態坊主」キャンペーンの中でロス・アンジェルスのカトリック司教が深い考えも無しにその攻撃に降参するのだが[1]、この攻撃は明らかに迫りつつある戦争の徴である。この三文芝居はイラクへの侵略の前にも米国ではやったものだ。それは実際にシャロンが２００２年にベツレヘムを包囲しパレスチナを破壊している間に起こった。そのとき、何百人もの４０代の男女が突如として２０年くらい前に自分が虐待されたことを思い出したのである。それは２００３年のイラク侵略に先立って上がったヒステリックな金切り声だった。そして今、新たな憎しみの先触れとして再び演じられつつある。闇の力が人類に対する新たな攻撃を準備するときにはいつでも、彼らはそれに抵抗する可能性のある勢力を黙らせるための有力な武器を用いる。それは公然の敵である教会から始めるのだ。これは第三帝国でも行われたことだった。戦争を始める前に彼らは教会を黙らせるために「男色坊主」のキャンペーン[2]を始めたのだ。そして今度は第四帝国の番である。カトリック教会はイラクでの戦争に反対していた。教会はパレスチナ擁護の態度を固めていた。教会は切迫するイランへの戦争に間違いなく反対する。だから教会は守られなければならないのだ。同じ米国のメディアをコントロールする者たちがイランとの戦争を呼びかける。そして彼らがカトリック教会に対するキャンペーンの背後にいる。

われわれの敵と教会の敵は、メディアのコントロールを通して、「変態坊主」の亡霊をでっち上げ、ロス・アンジェルスの司教を「最終解決」の罠にはまるように上手に説得した。彼らの望みに従ったが最後、すぐにこの司教は何も終わっていないことに気がつくことになる。降伏は何の解決ももたらさない。彼らはドイツ人から学ぶことができた。ドイツ人たちはユダヤ人の要求を１０億ドルで満足させることに合意した。（これはユダヤ人の交渉役ナフム・ゴールドマンがその著書「ユダヤのパラドクス」[New York: Grosset & Dunlap, 1978]で描いているとおりである。）それがやがて６００億ドルを払うようになり、その結果まだ１８００億ドルを自分のものに出来ることが分かり、そしていまや、要求に使う人数が減りつつあるのをたっぷりと補うために戦争中の被害者の子供たちに支給するという新たな訴訟[3]が起こされているのだ。もし支払うことに合意するお人よしがいるなら、その人はこの連中の手から逃れることはできないだろう。

この告発のあり方自体がどう贔屓目に見ても間違いである。もし一人の男性が僧侶であ

りながら少年を強姦したのなら、それはやはりその男の犯罪であり彼が責任を負うべきである。その犯罪が裁判所であらゆる筋の通った疑問を退けて証明されるのであれば、そしてそのような場合でならそうであろう。同様に、もし一人の男性が軍隊に勤務しあるいは消防隊で働きながら少年を強姦したのなら、それは彼自身の責任であり、軍隊や消防隊の責任ではない。司教たちはそのような法廷に同意する何の権利も持たなかった。もし反キリスト教の判事がそのような法廷を認めるのなら、教会はそれに同意するよりもむしろ解散すべきである。司教たちは教会ではないしまた聖職者でもない。カトリック教会は崇拝者全員の神秘的な体である。キリストの花嫁であり、それは信仰者個々人の過ちに関するいかなる裁判の主題でもないのだ。その司祭や僧侶や一般信徒は誤っているかもしれないにしても教会は常に正しいのだ。

翻って考えてみるとこのモデルは役に立つかもしれない。もし誰かがカトリック教会を訴えることができるとすれば、人は間違いなくその伝統的な競争相手をも訴えることが可能とすべきであろう。ユダヤ人である。もし教会が「変態坊主」の償いをするのなら、ひょっとしてユダヤは「詐欺師ユダヤ人」の償いをするのだろうか？　ユダヤ人の投資家、土地開発業者や保険代理人に騙された人々による訴えをリストに一杯にするならば、それは１兆ドルにも上るだろう。エンロンの事件（明白なユダヤ人による詐欺のケース）ひとつとっても、「変態坊主」の金を帳消しにするに十分であろう。教会が訴えられている同じ法廷でユダヤが訴えられるとしてみよう。ユダヤ組織には差し押さえるのに十分な資産があるだろう。多分それで、政治家を買収してパレスチナ人を殺すために注がれる資金が不足するようになることだろう。

一羽の小鳥が私にこう言った。ユダヤ人たちは決して集団的な責任を認めようとしないだろうと。彼らは引っかき集めるためなら喜んで集団的になるが、支払うためにはそうしない。 そして彼らが集団的な責任を受け入れることに同意しない限り、カトリック教会もそうすべきではない。もしローマ教皇がロス・アンジェルスの司教に対して同様の権限を持っているのなら、彼はその司教たちを辞めさせ、その解決を無効にし、そして次のように宣言すべきである。教会はどのような個人の過ちのために責任を負わされることに決して同意しないことを宣言し、この集団訴訟に参加した全ての者を破門にすべきである。貪欲は勧められるべきものではない。しかしながら元々良かろうが悪かろうが、金銭上の利益を手に入れるために教会そのものを破壊しようとすることによって、その請求者達は完全に過ちに陥っているのだ。

前の教皇ヨハネ・パウロ２世時代に奇妙な慣習があった。歴史的な罪に許しを請うことだ。これがこの種の出来事の原因を作った責任を負うべきことである。彼にはそのような許しを請うような資格は無かった。それが全てのカトリック信徒に、たとえブラジルの５歳の少女であっても、５００年ほども以前の教会の敵に対する誤った取り扱いの罪を背負わせることを意味したからである。もし彼女が、十字軍とかコンスタンチノープルへの襲撃とか流血の反乱を含むような、教会の首長が許しを請う全ての事柄で起こされた被害の

ために告訴されないとすれば、教会は大いに喜ぶべきである。

新たな要求がきっと注ぎ込まれるだろう。これは人間の性である。一人の僧侶によって虐待されたと言うことで１００万ドルを手に入れる方法をある男に教えてみるが良い。きっと大集団がそれぞれの訴えを持って列を作ることだろう。一部の者はあからさまな嘘つきと詐欺師だろう。ロリ・ハイ[4]の名が思い浮かぶ。この女性は２００２年にロス・アンジェルスとオレンジ郡のカトリック司教区から強姦に対する弁償金１２０万ドルを受け取った。２０年以上も前に彼女が音楽の活動をやらされている間にある聖職者によって強姦されたという話だった。後になって、彼女は他のさまざまな機会を狙って強姦被害者のふりをし、それは嘘つき・詐欺師として警察に逮捕されるときまで続いたのである。

他の者たちも偽の記憶を作って解決を求めるだろう。偽の記憶は極めて現実的である。私は自分が全く経験しなかった出来事を「記憶している」ことに気付いている。私がそれらのことについて何度も聞かされたからである。人の本当の記憶を回復させ偽の記憶を消すのは実に大変なことなのだ。エルサレム市民は１９４８年の都市包囲戦の恐怖を語るだろう。しかし当時の新聞は包囲戦など全く無かったことを明らかに語る。最近イスラエルの歴史家ウリ・ミルシュタインが証明したようにである。

性的暴行事件は多くの賠償請求者を作り出す。数年前にセファラディ・ユダヤ人のイツィック・モルデハイ将軍はイスラエル首相の座に近づいた。アシュケナジムのエリート支配者達はこれを喜ばなかった。彼らはこの精力的な将軍にレイプされたと主張する少女を見つけ出したのである。その賠償請求が公表された後で、何十人もの女性が同じような主張をし始めたのだ。それらの賠償請求は事実無根とされたが、しかしモルデハイが首相になる機会をつぶしてしまうに十分な悪印象を作った。このトリックはセファラディムの大統領モシェ・カツァフに対して向けられ有効に働いた。このケースで最初の告発者は失敗した。しかし警察は何十人と言う告発者の中からいくつかの有力な証拠を見つけ出した。米国ではこういった自称「賠償請求者」たちの波が津波のように盛り上がる。何百人も何千人もが強姦されたと訴え出るのである。平均して約２０年前の話であり、中には４０年前というケースもある。

私はこんな後出しの告発者に対しては何の同情もしない。どうして彼らは２０年間も待っていたのだろうか。もしある少年や少女が襲われるのなら、彼または彼女は悲鳴を上げて両親の元や警察に駆け込むことだろう。もし彼らがそうしなかったというのなら、何も無かったということだ。それが不器用なやり方であったり、不愉快な経験であったり、誤解の結果であったりすることを考えてみるが良い。自分の優柔不断を責めよ。人生を歩め。人間らしくなれ。我々の誰でも、父親でも母親でも、望んでもいないキスや抱擁に悩んだことがあるのだ。法律は筋を通すべきである。２０年も昔に起こったそのような出来事の告発を許すことは筋が通らない。即刻の告発が有効とされるべきである。そして最長のケースでも２４時間以内の告発までを許すべきである。

もしある犯罪が起こったら犯人は処罰されるべきであるが、しかし告発者はその犯罪を報告したことによっての利益を受けてはならない。これが必要とされる正義による支配である。さもなければ、告発者が告発された者が持つ資産の３分の１を要求できた時代に逆戻りするだけだ。正直な強姦被害者なら、巨額の金銭支払いを勧める米国の法システムによって与えられる誘惑を拒否すべきであり、またその取得物を教会に帰すべきである。どちらにせよ、ダショーヴィッツ【訳注：米国の著名なシオニストの法律家】のような弁護士だけが勝利するのだ。ホロコースト生存者の利益という名目でユダヤ人弁護士たちによって集められた莫大なカネから、実際の元捕囚者たちにはごくわずかしか渡されていない。残りの大部分は弁護士達の金庫の中に収められた。

高額の賠償請求をする訴訟は不道徳的であり非生産的だ。ある女性がマクドナルドの熱いコーヒーで火傷をして１００万ドルを手に入れ、ある男性が煙草を吸いすぎて１００万ドルをかき集める、などといったことが訴訟を起こす誘因となる。弁護士の報酬は勤労者の給料の範囲内に治められるべきであり、それによって彼らは法廷をルーレットに変えることができなくなる。米国人たちはその法システムの改良を考えるようになるかもしれない。それが偽物の正義だからだ。米国の判事達はパレスチナ人たちへの拷問による告発を拒否し続けているのだが、イスラエルと米国のユダヤ人たちにはパレスチナ人やイラン人のお金を与え続けているのだ。

世界の他の諸国では人々はこのような巨額の損害賠償請求無しでちゃんと生活している。お金は単にお金であり、こういったドルの追求は極端に気を引かないものだ。フロイドはお金を心理学的にクソに等しいものと見なした。赤ん坊は金の指輪を身につけて誇らしげに顔を紅潮させる。ある７世紀のアラブの本は二つの村の間で起きたクソ競争の話を伝える。その勝利者は最も大きなクソの山を作った者である。これは多分フォーブスによって提供されるものよりもずっと善良で健全な競争の仕方であろう。

II

米国人は年少者のセックスの問題を極端に単純化する。彼らはそれを何か怪物的なもののように取り上げる。実際にはそんなものではない。あなたはロメオとジュリエットにむかつきを覚えるだろうか。善良な米国市民としてはそうなるべきだろう。ジュリエットは１４才であり、ロメオは現代の米国でなら裁判にかけられ「児童性愛者」として、その共犯者である善良なフライアー・ローレンスといっしょに刑務所行きになるところだろう。フライアー・ローレンスは間違いなく「変態坊主」と見なされることだろう。そしてダショーヴィッツの類が恋人たちの駆け落ちを手引きした罪に対してヴェローナ司教区から１００万ドルをせしめることになる。ヴェローナの恋人達ばかりではない。エドガー・アラン・ポーは１４才の少女と結婚した。そしてもし現行の法律が通用していたのなら、この米国の詩人は大ガラスの「もう二度とない」という声を牢獄で聞くことになるだろう。預言者ムハンマドは９才のアイシャと結婚したが、聖書に出てくる族長ヤコブはもっとひど

いことに７才であったラケルと結婚した。現代ならば、ヤコブもムハンマドもとっ捕まり裁かれて刑務所行きになるところだ。我々の時代の高度に啓蒙化された裁判に出くわしたらもっと高いところにいる人でも無事には済まされないだろう。我々の救世主の母親はわずかに１４才で受胎告知を受けたのだ。

その経験を少年と分かち合う成熟した女性も常に認められていた。ギリシャの古典であるダフニスとクロエ[5]では、二人の若い羊飼いが愛し合うのだが（現代の米国でなら彼らは刑務所行きだ)、その以前に、経験豊富で成熟した女性であるリケニオン（Lycaenion）が若いダフニスに、どのように彼のガールフレンドをものにできるのか、そしてお互いに満足しあう方法にいたるまでの手ほどきをした。今日の英国で、２６歳の女性教師が１５才の生徒とセックスをした罪で処罰を受けた[6]。「若く魅力的な女性教師からその種の誘惑を受けることがあらゆる男子学生の夢である」ことを検事ですら認めたのだが、それでもやはり処罰を要求した。米国では、パメラ・ロジャーズ[7]が大人と同じ体格をしている少年とセックスをしたという罪で何年間もの懲役に処された。彼はその当時１３才だったのだが、私の曽祖父はその年齢で結婚にこぎつけたのだ。もしロジャーズ夫人がむしろその少年を強姦して辱めたということであれば、彼女は学校の中で出世できたのかもしれない。ひょっとしたら国務長官にでもなることができるのではないか･･･。

一人の子供を不具にしあるいは殺す者は刑務所に行き、刑期を終えて自由の身で出獄する。１４才の少女とセックスをした男は刑期を終えた後、性的虐待者の役を担わされることになるだろう。彼の名前と住所はあらゆるインターネット使用者が入手できるものとされるのだ。英国と米国という大西洋を挟むネオリベラル双生児国家では、近所にいる全ての性的虐待者の居場所を知らせる特別の業務がある。この両スーパー・リベラル国家のあり方は、株式市場でのみ幸福の追求を許す覗き見野郎のそれである。

米国人と英国人は、まるで検事が少年や少女たちが何を望んでいるのかを彼ら自身よりもよく知っているかのように、「法令で定められたレイプ」という馬鹿馬鹿しい概念を発明した。偉大なフランスの思想家サルトルとデリダ、フーコーとボーボアールは１９７７年にみんなでこの法的な発明を無視するように呼びかけた。賢いスペイン人達は結婚が承認される年齢を１３才と定めたが、一方で、もっと賢いイスラム教徒たちは結婚の年齢制限を一切持たない。しかし彼らは夫婦以外の性的関係を認めない。同様に賢いユダヤ人達は少女が結婚を許される年齢の制限を「３年と１日」と明文化するタルムードに従った。しかし彼らは少年愛を厳しく禁止する。

実際には、性的虐待とされるほとんどのケースがホモ・セクシュアルなのだ。被害者とされる者は教会というよりはゲイ解放運動組織を訴えるべきである。しかし教会はそのような言葉をつぶやくことすら許されていない。彼らは「男色」と言うことができず、それを「児童性愛」であると称する必要がある。彼らは同性愛の僧侶から僧服を奪うことができない。「ホモ嫌悪」であるということで攻撃を受けるだろうからである。米国では同性愛

に対する強力な弁護がその公式の教義に内包されているのだ。「同性愛を好まないこと（ホモ嫌悪)」へのタブーはおそらく「ユダヤ人を好まないこと（反ユダヤ主義)」へのタブーに次ぐものだろう。これらの二つのタブーは米国では実に堅固に確立されている。それについて語ることすらタブーであり、そこから第２義的な攻撃が形作られている。反ユダヤ主義から派生するのが「人種差別主義」であり、ホモ嫌悪から派生するのが「児童性愛」なのだ。

イスラエルでは、米国的な民主主義とリベラリズムに対する忠誠を示すためには、男を去勢することと女を脱女性化することよりもふさわしい方法が無いように思える。我々の小さなユダヤ人国家イスラエルでは、あの雄々しい６日戦争以来事態が変わった。そのときには同性愛が禁止されていたのだ。片目の国防相ダヤンが全ての女性の徴兵を押さえつけ、イスラエル軍は三つのアラブ軍を１週間で撃破した。いまやゲイの性向は何の障害でもなく、長官たちは少女にキスしただけで訴えられ、そして軍は少数の髭面のレバノン人に打ち負かされる。かつてはイスラエルの少女は非戦闘員として軍に勤務した。彼女らの主要な任務は賢く快活に見せることであり、そうして少年達が十分に戦えるように鼓舞したのである。今では彼女らはジュディスとジールの例に従ってヘルメットを被って戦闘任務に付き、男性ホルモン漬けになった東ドイツの水泳選手のように見える。

そのベルトにパレスチナ人の頭皮をくくりつけて（サムソン時代の慣わしである包皮ではなく)、彼女らの兵役が終わった後でもはやこの新しい女性の品種であるサブラ（*sabra*）は通常の結婚にはふさわしくない。そして彼女らはテルアビブでレズビアンの集団を作ることになるのである。その一方で男性の同性愛者たちは往々にして従順であり、女性達がリーダーシップを取り彼女らがゲイ組織の主流派をリードする。外務長官で元諜報機関員あるツィッピ・リヴィニはレズビアンの背景を持っていると言われるが、だからこそ彼女の愛国的な姉妹達に率いられるゲイ組織に何百万ドルという資金を渡した[8]のである。伝統的に自立しすぎてしまい、ユダヤ人女性はいまや戦闘部隊で勤務し、男性と同額を稼ぎ、常備警戒に当たる警官の好色な視線から守られるようにまでなったのである。彼女らは睾丸を膨らませて男性のようになったのだが、しかし、決断力ある強い女性と弱々しく従順な愚図でその賛美者である男性を描いた映画によって力づけられ、もはやそれ以上のものになっているのである。

男性たちもそのメッセージを受けた。もし少女達が少年達と同様に激しく、さらにもっと要求しもっと訴え出そうであるのなら、一体誰が彼女らを必要とするのだろうか。ある統計ではテルアビブの人口の２０％が同性愛者であり、他の調査ではもっと高い数字である。ゲイとレズビアンは完全な権利を持っている。彼らは養子をもらい、彼らの「結婚」は外国で行われたものならば容認され、彼らは被雇用者やテナントとして逆差別的に優遇される。彼らがより多くの可処分所得を持ちそして決して妊娠しないからである。彼らは極めて愛国的である。テルアビブの代表的なゲイの詩人はイスラエルにガザとベイルートを消滅させるように、そしてアラブ人の頭蓋骨を打ち砕くように呼びかける。彼らは占領

軍内で勤務する権利に固執する。彼らは占領地からの特別な利益を引き出す。安価な若いアラブ人の肉体である。暮らし向きの良いゲイたちは難民キャンプの封鎖と喪失から逃れる少年達と同棲し、当局者達はこのアパルトヘイト違反を大目に見る。しかし分離壁を超える男女の集団は許されることがない。

同様のプロセスがもっと大きなユダヤ国家である米国で起こっている。少女達は軍勤務に入ることを迫られている。彼女らは釘のように固くなり、その結果、男達はますます他の男たちに、当然のごとく若い男や少年たちに走る。僧侶達もおそらく例外ではあるまい。この最終的な責任は教会が負うものではない。女性達の軍務を支持するフェミニストとレズビアン運動が負うべきものだ。そしてこのような傾向を推し進めるメディアが負うべきものだ。

さて、成人男性による幼い少年や少女に対する性的暴力は強制的なものであり犯罪的な行為なのだが、しかしそれは極めて希なことである。それを拡大解釈して、たとえ暴行が無い場合にでもまさに強制的な行為であると認めることは可能である。しかしそれを単一的に正しい判断とするのではなく、むしろ文化の問題だと気付くべきであろう。

III

我々はこのカトリック教会の苦難に無関心なままでいることはできない。教会が、米国を今日そうであるような略奪者のネオ・ユダヤ的国家から平和を愛するキリスト教国家に変える、潜在的な力を持っているからである。その司教たちは教会の敵を満足させようとしてあまりにも道を踏み外してしまったのだが、しかし彼らは今や、この道が破滅につながることに気付いている。次の機会には、もし次があるのなら、彼らは勇敢になるのかもしれない。我々は、それが「変態坊主」の件であろうが先の教皇ピオとドイツ帝国に関する当てこすりであろうが、こういった攻撃から教会を守るべきである。そこに何の関連性も無いために、無知で騙されやすい者達だけがこの出来レースの背後に何か確実な事実があるかのように頭をひねりたがるのだ。これは全くの誇大宣伝だ。ペンシルバニア州立大学の歴史学・宗教学の主任教授であるフィリップ・ジェンキンズが著作「児童性愛と僧侶」で明らかにしたとおりなのだが、教皇ピオの名前は何度でも繰り返してその嫌疑を晴らされている。

教皇ピオの件に関する告発は一つの鏡像である。つまりカヤパ【訳注：キリスト時代のユダヤ教の大祭司】への告発のパロディーであり、それはちょうどホロコースト教がキリスト教信仰のパロディーであるようなものだ。キリスト教の教義では、カヤパがキリストをローマ人の手に渡して十字架につけさせたのだが、これがユダヤの指導者とキリスト教の僧侶の先天的な憎み合いに関係している。ホロコーストの教義では、教皇ピオがユダヤ人をドイツ人に差し出したことになっており、これがホロコースト教徒のローマ教会に対する全面的な敵対心を確実なものにしている。事実がどうかなどというレベルのことは問題にもならず、その告発は何度も繰り返して行われてきた。我々の執拗な敵は決して諦めない。

その敗北を決して認めないし、人々が告訴しない限り事実を決して認めようとしないのだ。

この敵とは誰だろうか。ある人々はメディアに大きな支配力を振るうイスラエル・ロビーについて述べる。かの有名なパンフレットの中では、それはシオンの長老と呼ばれた。他の者達はイルミナティと呼ぶ。私はそれを「言論支配者（the Masters of Discourse）」と呼んだ。ウォールストリート・ジャーナルからウイキペディアにいたるまでの、大衆的な隠蔽と洗脳のためのあらゆる装置を総合的に操る者達である。何千何万ものネットワーク、新聞、雑誌、書籍、映画そして思想は一つにまとめられ、彼らの見えざる手によって導かれ、一方で自由な思考はウエッブの手の届かないところで生き残っている。恐怖すべきＡＩＰＡＣは目に見える氷山の一角に過ぎない。その下には延々と何マイルも続く固い氷があるのだ。メディア支配者、主任編集者、そしてその手下ども、つまり「言論支配者」である。彼らの力の土台はメディアに、そして真実に見せかけた偽の情報を創造し人々を誤った方向に導くその能力にある。最近ジョン・ピルジャーがこれを「見えない政府」**[9]**と説明した。

この「言論支配者」が共産主義と戦ったときに、彼らはいくつかの見せ掛けの「事実」を作り上げ、それを飽くことなく繰り返し流し続けた。彼らは唖然とするような数字を使ってそれを行った。共産主義者は３千万、いや４千万、いやいや６千万人を殺したんだと。しかし自由に手に入るソ連の人口統計の数字によってそれが５倍にも膨らまされた驚異的なものであると分かった。彼らはソビエトの反ユダヤ主義を発明したが、しかしソビエト政府と治安組織の高官には常に大勢のユダヤ人たちがいた。彼らはソビエトの全体主義を発明したが、しかしソビエト人は自由にその政府を支持した。聖杯の代わりに彼らはラウル・ウォーレンバーグを手に入れた。彼はどこか遠い場所の刑務所に閉じ込められて奇跡的に生き残ったと推定された。彼らは調査など全くやろうともしないのだが、それは彼らの発明がそのあり方そのもの、すなわち嘘っぱちであると認めるがゆえにである。

現在彼らはイランを破壊しロシアをつまずかそうとしている。これらの地が神を忘れなかったからである。彼らはカトリック教会に、あらゆる教会に、それが共産主義であれイスラムであれ正統派ユダヤ教であれ、あるいは伝統的な敵である使徒教会であれ、それらに敵対して戦う。あらゆる教会が彼らの強盗行為から大衆を守り支配を求める彼らの闇の力に抵抗するからである。教会は魂の優先を堅持し、人間の善なる性の優先を堅持している。それはこの「言論支配者」にとっては呪いである。より深いレベルでカトリック教会は彼らの主要な敵対者である。教会がその種の闇の教会と戦うものであり、そして戦いの相手に対して容赦しないからである。

彼らは支配的ではあるが決して全能ではない。我々は彼らを恐れるべきではない。彼らの呪文に魔力などは無い。彼らの背後には何の神聖な権力も無い。彼らは詐欺師なのだ。彼らは人類の古臭い神話を発掘するが、神無しでは何も動かないことを忘れる。この「言論支配者」はシオニストと双子である。シオニストは先祖達に約束されたようにイスラエ

ルの聖なる地への帰還を演出すると決めた。しかしながら、この帰還は神によって行われるべきものだった。だが人間が神の仕事をやろうとすることは間違いなく反逆である。真似したがりの邪悪な神々に似て、彼らは治安部隊によって支配される地獄の政治体制を作った。そして愛すべきパレスチナの地を破壊した。その結果があまりに悲惨だったので、シオニストのプリンス、アヴラム・バーグは近ごろ同胞達に他国のパスポートを入手して移民して出て行くように忠告したのだ。

「言論支配者」は全地球的なスケールで似非ユダヤ的宇宙を創造しようと試みている。彼らの見通しは例のプロトコールの著者によってグロテスクな形で示された。しかし彼らがもたらした現実はその双子の片割れがパレスチナに創ったものと同様に成功していない。同様の治安軍による支配、同様の恐怖支配、同様の思想的悪徳、同様の自然性の破壊、同様の魂の貧困化、同様の民族性の根絶、同様の差別政策、同様の終わりなき戦争、･･･、彼らが手本にしようとした預言者の約束からその全てがすっかり取り除かれている。

神に対する反逆であるため、彼らは打ち破られるだろう。大ぼら吹きとして彼らは解体されるだろう。彼らの転落は差し迫っている。しかし、我々の必死の作業が無ければ、我々の理解していることが広く伝わりみんなに理解されないことには、それは起きないだろう。我々は彼らを完全に拒否すべきである。我々が信仰告白で求められるのと同様に完璧に拒否すべきである。

IV

カトリック教会は平和のための最も強力な機関である。教会は我々を平和に導いてくれることができる。もし我々が声を上げてそれを助けるのなら。膨大な数の人々が教会の周りで連帯すれば、中東での戦争は歴史上のものになるのではないか。米国人は東の方にその例を探すことが出来よう。この米国最大の使徒教会が金銭のために傷ついている一方で、東方では魂の巨大な高揚が起こっている。トルコでは８０年間の唯物主義による独裁が終り、人々は神の元に戻り信仰の政党に票を投じた【訳注：2007年6月にトルコの総選挙でイスラム政党が勝利したことを指す】。主の土地であるパレスチナでも同様のことが起きている。ハマスが選挙で勝ったのだ。東方のどこででも、カイロからモスクワに至るまで、東方は無神論者政権の唯物的な冷たい足かせを外して神の元に戻っている。【訳注：ここで「東方」と訳したのは the East だが、ここでは正教つまりキリスト教東方教会、イスラム教、正統派ユダヤ教といった根を同じくする一神教を奉ずる地域を指す。】

米国人たちはこの流れに倣うことが出来よう。教会 ── カトリックのそれとその姉妹である正教の ── は西のイスラムであり、そしてそれは相補的なものである。米国に、カトリックのハマスが台頭し、このゲームのルールを変え、世俗主義の双子である共和党と民主党から支配権を取り去ることにとって有利な場がある。アタチュルクの近代的で暴力的な反宗教的社会の中でイスラムがその尊敬と栄光の場を取り戻すことに成功し、またレーニンの地で正教会がそれを達成したのなら、キリスト教会は米国の中でも同じことを成し

遂げることができるかもしれない。教会が民衆の側に立ち、そして民衆が教会の側に立ってその敵を打ち破ることができよう。

変態坊主の一件は米国で独立した勢力としてのカトリック教会を根絶させるかもしれない。すでに５つの司教区が破産を宣言している。しかし教会はそれでもそれを乗り越えることが出来るだろう。教会はその資産を捨て去ってそれを地方の小教区に移管し、通謀者を取り除いて生き残ることが可能である。ちょうど使徒たちの時代と同様に貧しく乏しくそして戦闘的にである。教会は降伏してはならず攻撃に立ち向かわねばならない。教会は偉大で積極的なモラルの力として米国を平和と繁栄に導くことができるし、ブッシュ政権からイラクからの即時撤退の要求を勝ち取ることができる。もし教会組織が平和のための戦いでもっと活動的になるのなら、それはより多くの人々をひきつけることだろう。しかし、一つの自立した独立アメリカ教会が米国使徒教会、つまり正教会とカトリックから湧き出すことも可能だろうし、その光が背教者の闇を打ち破るのかもしれない。

残念なことに、我々の友人の一部はこのことを理解できずにカトリック教会への攻撃に加わる。これはあたかも一人の歩兵が敵の戦車の上で敵側の攻撃に参加するようなものである。単に戦車隊員が嫌いだという理由だけのために。

カウンターパンチ誌は親パレスチナ・メディアの旗艦である。これは我々にとって親しみのある最大のサイトの一つであり、我々の友人達によって書かれる多くの論文を公表している。しかしカウンターパンチ誌では、誰もカトリック教会のことを良く言わないし、間違いなくキリストについて述べることも無い。このサイトの Google 検索を見ると、彼らはエルサレム・ポストと同じくらいに教会を激しく攻撃する。（以下の例を見よ。www.counterpunch.org/sexabuse.html、www.counterpunch.org/jensen09282006.html、www.counterpunch.org/smith03092004.html などなど。）

最近、同誌は、バドゥルディン・カーンの記事を公表した[10]のだが、彼は次のような厚かましい嘘をとどまることなく繰り返した。「こういったカビの生えたような戦術はわずかに１世紀ほど前にキリスト教徒がユダヤ人に対して使ったものだった。カトリック教会は、キリスト教徒の子供達の血を過ぎ越しの儀式のために使ったということでユダヤ人を非難する回覧を発表している。ユダヤ人全員が（世俗の者でも改宗者でもあるいは異教徒と結婚していても）マークされ邪悪で隔離に値するものとして特定されたのだ。このアパルトヘイトの状態はホロコーストの組織犯罪が起こることを許したのである」。

これは嘘であり、最も安物のシオニストの教科書中でのみ発見できる誹謗である。実際のところ、ユダヤ人改宗者は教会の中で例外なく教会で歓待され、一部の者たちはその高位に就いた。一覧表にすれば長すぎて書けないだろう。聖パウロや聖ペテロ、十字架の聖ヨハネ、アヴィラの聖女テレサからフランスや他の国々の教会での主導的な司祭達に至るまで。教会は確かに、過ぎ越しの儀式や他の目的でキリスト教徒の子供の血を使ったユダヤ人たちを非難したのだが、バドゥルディン・カーンは教会がそのような不当な行動を是

認するように望んでいるのだろうか？　とどのつまりがホロコーストだが、これはデタラメである。ヒトラー政権は何よりも暴力的なまでに反カトリックであった。彼らは実に、今の米国のメディアがコピーする「変態坊主」キャンペーンの草分けだったのだ。カウンターパンチ誌がユダヤ人に対してこのような攻撃的な嘘をばら撒くことは決してしないことは疑いの無いところだが、カトリック教会には好きなように攻撃できるのである。

我々の良き戦友であるビル＆キャシー・クリスティソンは、自らカウンターパンチ誌に書いたように[11]、フィンケルシュタイン教授の雇用契約が打ち切られたことでカトリック大聖堂の前のデモに参加した。私は彼らに問いただした。どうして彼らは、シナゴーグでもブナイ・ブリスの本部でもＡＤＬでも良いから、ユダヤの機関の前でデモをしなかったのかと。彼らは次のように答えた。「あなたが米国の中では反何々が可能だが反ユダヤや反イスラエルは例外だというのは極めて正しい。イスラエル・ロビーはあまりにも強く乱暴であり非常な政治的権力を持っているため、どの政治家も解説者も反ユダヤ主義者のレッテルを貼られ言論の主流から外される恐怖感無しでイスラエル批判を敢えて行うことができない。ホロコーストの結果として（これはロビーが常に我々に注意を喚起することだが）、反ユダヤ的と思われる危険を背負いたいと思う者はほとんどおらず、したがってこれが強力な兵器であり時が進むに連れてますます強力になっていくのだ。」【訳注：ノーマン・フィンケルシュタインの件については『真相の深層』誌に同時掲載される拙稿《「イスラエルに支配される米国」の事実から逃げる、あまりにも哀れなフィンケルシュタインの知性》をご参照いただきたい。彼を首にしたデュ・ポール大学はカトリック系の学校である。】

カトリック教会の前でデモを行うことは、無くしたコインを探すために街灯の下に行くようなことに似ている。そのコインは暗闇の中で落としたのだ。ユダヤの機関の前は暗闇である。しかし我々は敢えて暗闇に光を当てなければならない。それが我が組織デイル・ヤシン・リメンバードのやり方である。そこは恒常的にシナゴーグの前でデモをする。そして大聖堂の前では、教会に敵対するのではなく教会を支援するためのデモを行う必要があるのだ。

カトリック教会はパレスチナでの最も偉大な主人公の一人である。パレスチナの大司教がおり、彼らはパレスチナ人を守っている。しっかりとした諸教会は全てパレスチナを支援している。諸使徒教会がその主導的な役割を果し、カトリック信徒が主要にそれらを指導する。２００２年に起こったユダヤ人によるベツレヘムの包囲の間、カトリック教会が行動を率いて私もそれに参加した[12]。私はカトリックではなく実際にはその競争相手である姉妹教会の聖地正教会に所属するものだが、しかしカトリック教会の方がいくつかの面で我々の教会よりも多くパレスチナ人を支援しているのである。

ビルとキャシーはこれに同意しなかった。「確かにカトリック教会はパレスチナ人に対して幾分かの良いことをしてきたのだが、しかし到底不足している。イスラエルがパレスチナでカトリック信徒を含むキリスト教徒を抑圧するとき、ローマ教会はどこにいるのか？

分離壁で取り囲みベツレヘムを破壊することに対して今の教皇からの抗議の声を我々は聞いただろうか？　あるいは前の教皇でも、２００２年に西岸地区に再侵略する間イスラエルが生誕教会を包囲したときに、同様なのだが。イスラエルが１９４８年にパレスチナの数多くのキリスト教徒の村を民族浄化した際にローマ教会はどこにいたのか？　イスラエルが多数のもう一つの信仰者であるイスラム教徒を弾圧しているときに、教会はどこにいるのか。６０年間もだ。イスラエルはイスラム教徒の祈りの場を汚し、イスラム教徒を民族浄化する。唯一の理由は彼らがユダヤ人ではないということだけなのだ。」

私は次のように答えた。カトリック教会はできる限りのことをしている。しかし教会は多くのことができない。２００年前のボルテール以来だ。あなたは「イスラエルがパレスチナでカトリック信徒を含むキリスト教徒を抑圧するとき、ローマ教会はどこにいるのか？」と問う。お許しいただきたいことだが、これは「ホロコーストが起こっている間に教会はどこにいたのか？」という標準的なユダヤの言い草を思い出させることだ。スターリンは、教皇があまりにも多くの教区を持っていることに気付いたとき、もっと現実的だった。実際には、カトリック教会はあらゆるイスラエルの罪に抗議した。教会はもしユダヤ・ロビーに、そしてこのようなパレスチナの防衛に取り掛かっていることを理解しない善意の人々に、攻撃されないのならもっと多くのことができるはずだ。

かつてローマ教会は聖地を解放するために十字軍を率いた。今、それはその同じ目的のために平和十字軍を率いることができるのだ。

（著者による関連サイト案内）

[1] http://www.guardian.co.uk/usa/story/0,,2127266,00.html

[2] http://en.wikipedia.org/wiki/Talk:Roman_Catholic_sex_abuse_cases#Nazi_propaganda

[3] http://www.foxnews.com/story/0,2933,289487,00.html

[4] http://www.freerepublic.com/focus/f-news/1151762/posts

[5] http://www.chss.montclair.edu/classics/petron/daphnisc.html

[6] http://news.bbc.co.uk/2/hi/uk_news/england/west_midlands/6122466.stm

[7] http://www.nashvillescene.com/Stories/News/2006/11/09/Inside_Pamela_Rogers/index.shtml

[8] http://www.jpost.com/servlet/Satellite?cid=1162378319794&pagename=JPost%2FJPArticle%2FShowFull

[9] http://www.twf.org/News/Y2007/0616-Propaganda.html

[10] http://www.counterpunch.org/khan05172007.html

[11] http://www.counterpunch.org/christison06192007.html

[12] http://www.israelshamir.net/English/Convoy.htm

＊＊＊

童子丸　開：　akiradoujimaru@hotmail.cp.jp
季刊『真相の深層』誌：　http://www.jca.apc.org/~altmedka/shoten-sinsou.html